

SEET (stimulation of endometrium embryo transfer) 法

江夏 徳寿／塩谷 雅英

Summary

高度生殖補助医療(ART)における一連の過程において、「胚移植法」は治療の成否を左右する重要なステップといえる。この「胚移植法」においては、着床能力のある胚を、胚受容能を獲得した子宮(内膜)に、胚と子宮(内膜)を同期させて移植することが重要である¹⁾。SEET法は胚培養液上清中に存在するサイトカインなどのシグナル伝達因子を移植前の子宮内に注入することによって、子宮内膜の状態を移植に適した状態に誘導する方法として開発された。本法は凍結融解胚盤胞移植において、多胎妊娠率を上げることなく妊娠率を向上させることが確認されている。

Key words

胚移植法

SEET法(子宮内膜刺激胚移植法)

ST法

着床不全

凍結融解胚盤胞移植

Noritoshi Enatsu

英ウイメンズクリニック／

英メンズクリニック院長

Masahide Shiotani

英ウイメンズクリニック理事長

はじめに

排卵誘発から採卵、胚培養、タイムラプスによる胚観察、胚凍結法、黄体補充療法、個々の患者のWOI(window of implantatio; 着床の窓)の時期を調べる子宮内膜着床能(endometrial receptivity analysis; ERA)、そして着床前染色体スクリーニングなど、近年における高度生殖補助医療における進歩は著しい。その一方で、胚の着床機序における免疫学的・分子生物学的知見はいまだ断片的なものが多く、胚の着床過程の全貌はいまだに十分に解明されていない。

生殖補助医療(assisted reproductive technology; ART)において、形態良好胚あるいは euploid 胚を移植しているにもかかわらず繰り返し妊娠に至らず、子宮内膜の胚受容能獲得の時期およびその質に問題があると推定される症例は少なくない。本稿では、子宮内膜の胚受容能獲得における胚あるいは胚由来因子の重要性に着目して開発された子宮内膜刺激胚移植法(stimulation of endometrium-embryo transfer; SEET法)について解説する。また、2022年4月からARTの保険適用に伴って、SEET法が先進医療として認められることとなった。それに伴い、今後SEET法の導入を検討している施設向けに実際のプロトコルを解説したい。

SEET法の原理

SEET法の原理を説明するにあたり、まず前身